世界名作劇場

プリンセス

小公女セーラ

『アメリア先生の涙』

第 40 話

提供　ハウス食品工業

制作　日本アニメーション
　　　フ　ジ　テ　レ　ビ

脚本　中西隆三

登場キャラクター（第40話「アメリア先生の涙」）

セーラ・クルー
ミンチン院長
アメリア先生
ベッキー
ピーター
モーリー
ジェームス
ロッテイ
アーメンガード
ラビニア

ジェシー
ガートルード
ワイルド医師
裏町の老婆
エミリー（人形）
シーザー（猫）
小犬

1

ミンチン女学院・全景（朝）

——朝日がさしはじめている。

何処からか、教会の鐘の音が聞えて来る。

2

同・馬小屋の中（朝）

父母の写真額と、エミリーを枕許に、ワラの一隅に突っ伏して眠っているセーラ。

鐘の音に、ふっと眼をさまし、身をおこす——

セーラ「お早う、エミリー……今日は、日曜日だったのね……」

3

同・二階廊下（朝）

出窓の日だまりで——さし込む朝日を浴びて眠ってい

るシーザー。
鳴り出す振鈴に、眼をさまし、大きく伸びをする ――

4

同・地下の食堂（朝）

――燃える暖炉の火。
セーラと、ベッキーが、既に食卓についているロッテイ、アーメンガード、ラビニア、ジェシー、ガートルード以下の女生徒たちの前に、それぞれパンと、スープを配っている ――
正面で見渡すミンチンと、傍にアメリア。
ミンチン「エヘン……そう云う訳で、今日は、私は、市長婦人のもとにお願いに上らなければなりませんので、皆さんと一緒に礼拝に参る事が出来ません……」
顔を見合せてざわめく女生徒たち ――

ミンチン「静かに！」

女生徒たち、静まる――

ミンチン「従って、今日の礼拝の引率は、アメリア先生一人ですから、充分に気をつけて、我が学院の恥にならないよう行動するように……判りましたね」

アメリア、ニコヤカに女生徒たちに微笑を振りまく――

ミンチン、セーラに眼を移す――

ミンチン「セーラ……」

セーラ、パン籠から、はっと顔をあげる。

セーラ「はい、院長先生……」

ミンチン「私が出掛ける前に、院長室を温めておくように……」

セーラ「はい、院長先生……」

5 同・院長室

暖炉の前で――煙る石炭を起しているセーラ。

ドアが開き、ミンチンとアメリアが入って来る――

ミンチン「なんですって?……礼拝の帰りに、廻り道をしたいと?」

アメリア「ええ、お姉様……実は、前々から生徒たちと約束していたんですの。いつか、セント・ジェームズ公園に、お散歩に連れて行ってあげるって……」

ミンチン、鏡の前で、手にした外出用の帽子を合わせながら――

ミンチン「呆れた……私に隠れて、生徒たちに取り入るような約束をするなんて……」

アメリア「ご、ごめんなさい……そんなつもりでは、なかったんですけれど……」

ミンチン「ま、いいでしょう……但し、生徒たちに、羽根を伸ばさせすぎないように…」

アメリア「は、はい、お姉様……」

ミンチン「セーラ！」

セーラ、振返り、立上る――

セーラ「は、はい、院長先生……」

ミンチン「馬車を呼んで頂戴！」

セーラ「はい、院長先生……」

6 同・表

外出姿で出て来るミンチン――待たせてあった辻馬車に乗込むと、走り出て行く。

7 同・

どっと歓声をあげるコート姿の女生徒たちに囲まれて、はらはらするアメリア。

アメリア「さ、騒がないで！……院長先生にやっとお許しを頂いたのですからね……あ、セーラさん……」

一方のセーラ、振向く――

セーラ「はい、アメリア先生……」

アメリア「モリーとジェームスに、お弁当を作って貰うよう、お願いしといて下さる？」

セーラ「はい、アメリア先生……」

アメリア「それから、お弁当は、ベッキーと一緒に、公園の方に届けてね」

セーラ「はい、アメリア先生……」

ラビニアたち、冷笑でセーラを見返している――

8 同・台所

ジロリと振返るモリーとジェームス――

モリー「なんだって？……弁当を作れだって？」

前に、セーラが戻って来ている。

セーラ「はい……アメリア先生が、私とベッキーに、公園に届けるようにと……」

ジェームス「フン……余計な仕事をふやしやがって……」

空鍋を手にしたベッキーが、嬉しそうにセーラに近づく——

ベッキー「でも、お嬢様……私たちまで、公園に散歩に行けるだなんて、やりましたですねえ」

セーラ「（微笑）え、ええ、ベッキー……」

ジェームス「（ジロリ）フン、調子に乗るんじゃねえ……弁当を作るなんざ、まだまだずっとあとだ！」

モリー「そうさ……その前に、さっさとお前たちの仕事を片附けるんだよ」

セーラ「はい、モリーさん……」

ベッキーも、しょぼんと首をすくめる。

9 セント・ポール大聖堂・全景

――鐘の音が鳴り響く。

×　　×　　×

出て来るアメリアと、ラビニア以下の女生徒たちの姿――

10 ミンチン女学院・地下の作業場

皿や食器を洗っているセーラとベッキー。

モリーとジエームスが、紙で上部を覆った手提籠二つを持って入って来る――

ジエームス「さあ、弁当が出来たぞ」

モリー「いいかい。お前たちの分は入ってないんだからね。用が済んだら、さっさと帰って来るんだよ。生徒さんたちと一緒に遊んでなんて来たら、ただじゃおかないからね」

セーラ「は、はい、モリーさん……」

11

同・表

使用人階段を――その二つの籠を持ったセーラとベッキーが上って来る。

12

セント・ジェームズ公園・全景

――美しい木立ちと、林の中の道。

乗馬の紳士と貴婦人たちが、軽やかに林の道を消えて行く――

13

フラッシュ

×　　×　　×

弁当の籠二つを抱えて、見廻しながら来るセーラとベッキー。

ベッキー「うわあ……お嬢様、セント・ジエームズ公園って、こんな広い公園だったんでございますか」

セーラ「ええ……私も、一度、お父様と一緒に来た事があるきりだけど……」

ベッキー「あ、ウサギです！」

見ると、草むらから、キョトンと立上ってこちらを見ている野ウサギの姿——

セーラ「（微笑）まあ……」

野ウサギ、ピョンピョンと林の中へ消える——

微笑で見送るセーラ——

（第一話より）
父と一緒に来るエミリーを抱いたコート姿のセーラ——

×　　×　　×

ベッキーの声がかぶる——

ベッキーの声「お嬢様！……お嬢様！……」

14 セント・ジェームズ公園の中

はっと我にかえるセーラ——

ベッキーが、心配そうにセーラをせき立てる。

ベッキー「あのォ……早く皆さんを探しませんと……またラビニアさんに文句をつけられますですから……」

セーラ「あ、ごめんなさい、ベッキー……多分、向うの方だと思うわ」

二人、一方へ歩き出す——

15

同・別の所

林から出て来るセーラとベッキー。
突然、一方から女の悲鳴が聞える——

声「た、助けてエ／……」
セーラとベッキー、はっとその方を見る。
セーラ「(愕然) まあ／」
ベッキー「ア、アメリア先生ですわ」

16

同・池のほとり

囃し立てる女生徒たちに囲まれて——ベンチの上に乗ったアメリアが、その下で吠えつく小犬に、悲鳴をあげて、右へ左へ逃げている。
アメリア「キャア／……あ、私、犬はダメなのよォ／……助けてエ

！」

どっと笑う女生徒たち——

ワンワン吠える小犬——

アメリア「キャア！」

アメリア、ベンチを飛び降りざま、夢中で一方へ逃げる——

吠えながら追う小犬——

笑う女生徒たち——

×　　×　　×

唖然と見るセーラとベッキー。

セーラ「ベッキー、行きましょう！」

ベッキー「はい、お嬢様……！」

二人、悲鳴の方へ走る——

×　　×　　×

池のふちの石積みに追いつめられたアメリア、両手を

あげて、悲鳴をあげる――

アメリア「だ、だれか来てエ！」

――吠える足許の小犬。

アメリア「キャア！」

一瞬、バランスを崩したアメリア、石積みから悲鳴と共に、池の中に落下する。

×　　×　　×

はっと見るセーラとベッキー。

セーラ「ア、アメリア先生！」

セーラとベッキー、手にした籠を置きざま、その方へ突っ走る――

×　　×　　×

池の中で――意外に浅いので、尻餅をついて悲鳴をあげているアメリア。

アメリア「た、助けてエ！」

×　　×　　×

駆けつけて来るセーラとベッキー。

一方からロッテイ、アーメンガード以下の女生徒たちも、意外な成行きに驚いて池の水辺に駆け寄って来る——

×　　×　　×

吠えていた小犬が、怪訝に首を傾げて石積みの上から見おろしていたが、その時一方から走って来た乗馬の紳士と貴婦人の姿を振返り、吠えながら追いかけて行ってしまう——

×　　×　　×

池の中から、びしょ濡れのアメリアを抱え持って水際に運び上げるセーラとベッキー、アーメンガード以下の女生徒たち。

アメリア「あいたた……お願い、そっとして！」

セーラたち、アメリアをそっと地面におろす――

アメリア「いたァーい……いたた……腰の骨が……腰の骨が……！」

茫然と顔を見合せるセーラ、ベッキー、アーメンガードたち――

ベッキー「お嬢様……これでは、とても学院まで、お連れ出来ませんです」

セーラ「え、ええ、困ったわね……」

悲鳴で痛がるアメリア――

セーラ「待って！……ピーターに頼んでみるわ」

セーラ、ぱっと一方へ走り去る――

ベッキー「お、お嬢様……！」

顔を見合せて肩をすくめるラビニア、ジエシー、ガートルードたち――

17

コベント・ガーデン市場の全景

――買出し客たちの雑踏。

18 同・その一角

掃除道具を手にしたピーターが、驚く。

ピーター「なんですって？……アメリア先生が池に？」

前に、セーラが来ている――

セーラ「ええ、腰を強く打って……お願い、ピーター、なんとか学院まで……」

ピーター「よしきた、荷馬車を借りて来まさあ！」

19 ミンチン女学院・表

その荷馬車が走りつく――

御者台にピーター、脇にセーラ――荷台には、アメリ

アに附添ったベッキー。
セーラ、飛び降りると、地下の階段へ。

20 同・台所

驚いてセーラを見るモリーとジェームス。
モリー「なんだって？……アメリア先生が？」
セーラ「ええ、それで表まで荷馬車で……」
ジェームス「ちッ、また余計な仕事か！」
ブツブツ云ってモリー、セーラとドアへ。

―C・M―

21 同・表（夕景）

辻馬車が走りつき、ミンチンが降り立つと――中へ。

22 同・院長室（夕景）

外出帽子をとったミンチンが、ジロリとドアの方を振返る――

ミンチン「なんですって？……アメリアが、池に……？」

そこに来ているモリー――

モリー「はい……なんでも、小犬に吠えられて、御自分でおっこったとかで……」

ミンチン「ンまあ……あの子ったら、なんて馬鹿気た真似を……それで、アメリアは、どこにいるんです?!」

23

同・三階の廊下（夕景）

階段口へ集って、アメリアの部屋の方を窺っているロッテイ、アーメンガード、ジエシー、ガートルード、ラビニア以下の女生徒たち――

階下から、ミンチンが上って来る。

ミンチン「な、なにをしているんです」

はっと振向く女生徒たち――

ミンチン「さ、早く、自分の部屋へお戻りなさい！」

ロッテイ、アーメンガード、ジエシー、ガートルードたち、急いで階下へ――

× × ×

ラビニアも、素早く三階の自室のドアへ走り込むと、細目にドアを閉めて窺う。

× × ×

ミンチン、階下へ去った女生徒たちを見届けると、再び、裾を摑み、アメリアの部屋へ突進する——

24 同・アメリアの部屋（夕景）

ベッドに突っ伏してうめくアメリア——
毛布の下に手を入れたセーラが、懸命にさすっている
——
アメリア「あいたた……そこよ、セーラさん……あ、ありがと……あいたた……」
ドアが開き、ミンチンが入る——
ミンチン「アメリア……！」
仰天するアメリア——
アメリア「あッ……お姉様！……あいたたた……」
セーラも、はっとミンチンを振返る。

セーラ「お、お帰りなさい、院長先生……」

ミンチン、答えもせずつかつかと近づくと、ベッド脇のセーラを払いのける。

ミンチン「あなたと云う人は！……私がいない時に限って、おろかな事ばかり引起して！」

アメリア「す、すみません、お姉様……あいたたた……」

ミンチン「なにが、あいたたです！……私がどんなに苦労して、市長夫人に、この学院の経営について、お願いに行って来たか、あなたには判らないのですか！」

アメリア「も、もうし訳ありません……」

ミンチン「勝手に、池に飛び込んだりして、それで生徒たちにしめしがつくのですか」

アメリア「ご、ごめんなさい、お姉様……」

アメリア、半泣きになる ——

傍で、たまらず出るセーラ ——

セーラ「あのォ……院長先生……」

ジロリと振返るミンチン――

セーラ「アメリア先生は、熱もおありの様子なんです」

ミンチン「それが、どうしたと云うんです」

セーラ「もしもの事があると……それで、お医者様をお呼びした方がいいのではないかと……」

ミンチン「医者を呼べですって?」

アメリア「い、いえ。いいのよ、セーラさん……お医者様など呼ばなくても……な、なんとか、我慢してみるわ……あいたた……」

ミンチン、アメリアを見て、大きく吐息し、吐き捨てる――

ミンチン「ま、やむを得ないでしょう……セーラ!」

セーラ「は、はい、院長先生」

ミンチン「アメリアに場所を聞いて、先日お前の為に呼んでやった

あのお医者を、呼んでおいで！」

セーラ「はい、院長先生……」

25　同・表（夜）

——使用人階段を上って来るセーラ、一方へ急ぐ。
——仄暗いガス燈の灯り。

26　裏町の通り（夜）

暗い露地を——探しながら入って来るセーラ。
突然、頭上の二階窓から、ザアッと、汚水が投げ捨てられる——
慌てて飛びのくセーラ——

27 同・路地の奥（夜）

探しながら来るセーラ――

背后から、声がする――

声「誰かを、お探しかい？」

セーラ、はっと振返る――

暗い中で、杖をついた老婆が、モグモグ口を動かしている。

セーラ「は、はい……あのォ、この辺りに、お医者様のワイルド先生のお住いがないでしょうか」

老婆「ああ……あの酔っ払い医者なら、家なんかにゃ、いないよ」

セーラ「え？」

老婆「ヒッヒッヒ……そこの通りの、居酒屋でものぞいてごらん。運がよきゃ、まだつぶれちゃいないかも知れないよ。ヒッヒッヒ」

老婆、ゆっくりと去る――

セーラ「あ、有難うございます……」

茫然と見送るセーラ――

28 あるパブの表（夜）

探しながら来るセーラ――

店内から、どっと笑声が溢れ出る――

29 同・店内（夜）

ドアが開き、そっと入って来るセーラ、おずおずと見廻す――

背を向けて呑む大男たちのシルエットと騒声――

ふと、一方から声がかかる――

声　「いよお……あんたは、なんとか学院の、メイドさんじゃないかね」

セーラ、はっとその方を見る。

カウンターから、ビールのジョッキを片手にしたワイルド医師が、ヨロヨロと近づいて来る。

セーラ「あ、あの……ワイルド先生でいらっしゃいますか」

ワイルド「さようさよう……そのワイルドでいらっしゃるわい」

どっと客達が笑う――

ワイルド「どうしたね……まさか、あの時の支払いが少なすぎたと、あの院長さんが追加をくれに寄越したんじゃあるまいね」

――どっと笑声。

セーラ「ち、違うんです……アメリア先生が池に落ちて、腰を打って……」

ワイルド「なんじゃと？……池に落ちて、腰を打った？……はて、そりゃまた奇妙な怪我をしたもんじゃね」

――どっと笑声。
セーラ「ほ、本当なんです。幸い池が浅くて……それで先生を……」
ワイルド「なあるほど……」
ワイルド、揺れる身体を保って客たちを制する――
ワイルド「笑うな、諸君……これで、この儂が、今でもお呼びがかかる医者だと、判った筈じゃ……では、メイド君、参るぞ」
フラフラと表ドアへ――茫然と続くセーラ。
そのあとからどっと客たちの笑声が追う。

30 ミンチン女学院・表（夜）

辻馬車が着き、鞄を持ったセーラが降り立つ――続いて、フラリと降りるワイルド。

31 同・アメリアの部屋（夜）

怪訝な顔で見守るモリー――

ベッド脇で、アメリアの診察を終るワイルドと、傍にセーラ。

ワイルド「心配なしじゃ……軽い打ち身じゃよ……張り薬を置いて行くから、時々かえてやれば、二、三日で治るじゃろう」

セーラ「よかった……アメリア先生……」

アメリア「あ、有難うございました、ワイルド先生……」

ワイルド「なあに、礼を云うのは、こっちの方じゃよ……なにしろ、儂を呼んでくれた患者は、久し振りじゃからな。はっはっは」

唖然となるセーラと、アメリア――首をひねるモリー。

32 同・表（夜）

ワイルドが出て来ると、ポケットから酒瓶を取り出し、クイッと一口やると、瓶を納め、待たせてあった辻馬車に近づくと、御者に助けられながら、乗り込む。御者が台に下り、ひと鞭あてて走り出す。

33

同・院長室（夜）

ジロリとモリーを振返るミンチン――

ミンチン「なんですって?……では、あのお医者が、アメリアの面倒は、セーラが見るようにと……?」

モリー「はい、院長先生……アメリア先生も、セーラを傍に置きたがってらっしゃいまして、ずっと腰をさすらせて……」

ミンチン、撫然と手をもみ、吐き出す。

ミンチン「馬鹿な事を……セーラをつけ上らせるだけです!」

34

同・アメリアの部屋

ベッドのアメリアの腰をさすっているセーラ――

アメリア「ありがとう、セーラさん……お蔭で、大分、痛みが少なくなったわ」

セーラ「(微笑)よかったですね、アメリア先生……」

アメリア「ね、セーラさん……」

セーラ「え……」

アメリア「私……前から、あなたにお詫びしなければと、思っていたのよ」

セーラ「あの……お詫びって?」

アメリア「お姉様のことよ」

セーラ「え、院長先生の……」

アメリア「ええ……本当云うと、私……あなたが、お父様を亡くしてからの、お姉様の扱い、とても申訳けないと思ってい

たのよ」

セーラ「そ、そんな……」

アメリア、首を振る——

アメリア「いくら、この学院があなたの為に不利益になったからって、今のような扱いをするなんて、あなたが可哀想すぎるわ」

セーラ「アメリア先生……」

アメリア「でも、お姉様を憎まないでね……私にとっては、お姉様は、母親と同じなんですもの……」

茫然と聞くセーラ——

アメリア「私たち姉妹も、小さな時に両親を亡くしたのよ……丁度、あなた位の年令だったお姉様は、生れたばかりの私を連れて叔母の家で働きながら、慈善学校を卒業したの」

セーラ「まあ……」

アメリア「それから、住み込みの家庭教師をしながら、私を学校に

やってくれ……苦労を重ねて、やっと今、この学院を経営出来るまでになったのよ」

じっと聞くセーラ、深く領く――

アメリア「だから、お姉様は、この学院の経営の事しか頭にない人になってしまったのよ。だから、あなたにあんなに辛く当ってしまうのだと思うわ。許して、お姉様を」

アメリアの眼に涙が光る――

セーラ「ア、アメリア先生……！」

アメリア「ね、セーラさん、今夜はこの部屋にいて下さらない？……そうすれば、あんな馬小屋に戻らないでも済むわ」

セーラ「あ、有難うございます、アメリア先生……」

その時、いきなりドアが開いて、ミンチンが入って来る――

セーラ「あ、院長先生……」

アメリア「お、お姉様……！」

ミンチン、ジロリとセーラを見る――

ミンチン「なぜ、こんな部屋にいつまでもいるんです！」

アメリア「お、お姉様……！」

ミンチン「お前の寝場所は、ここではない、馬小屋です……お戻り！」

セーラ「は、はい、院長先生……では、おやすみなさい」

セーラ、そっと出て行く――

35

同・台所（夜）

入って来るセーラ――ベッキーが迎える。

ベッキー「あ、お嬢様……台所仕事は全部片附けておきましたです」

セーラ「有難う、ベッキー」

モリーがのぞく――

モリー「さあさあ、仕事が終ったら、早く寝ないと、灯りの無駄だ

よ！」

セーラ「はい、モリーさん……」

モリー、去る――

36 同・地下の廊下（夜）

出て来るセーラとベッキー、

ベッキー「じゃ、お嬢様、お寝みなさいまし」

セーラ「お寝み、ベッキー」

ベッキー、一方へ――見送ったセーラ、灯りを消すと

反対の裏庭の方へ。

37 同・馬小屋（夜）

扉が開き、入って来るセーラ、そっとワラの上に坐る

と、エミリーをとり上げる。

セーラのN「そうです……私の寝場所は、矢張り、この馬小屋しか

なかったのです……」

おわり